

子ども教育学科 子どもの学び研究所取組の概要

後藤 吉道
宮内 孝
河野 康男
藤本 朋美
福富 隆志

I 目的

学部と連携拠点学校園との相互連携協力を深め、実践力を備えた学生の育成及び学校園の教員の資質向上を目指す。

II 研究経過

(1) 学部と連携拠点学校園との連携

学部と連携拠点学校園との具体的な連携については、2010年度からの基本姿勢を継続しながら「子ども支援地域活動」において学生に具体的に携わらせることを原則としてきた。

ねらいは、小学校及び幼稚園並びに保育の場に学生が参加し、子どもを支える地域の活動に参加することを通して、子どもの地域に果たす役割を実践的に理解し、それを支える活動の意味を把握させ、学部の講義で学んだことを実践力へと発展させることである。

2010年度を連携の基本的な事柄が整備された年として位置付けられ、2011年度は連携活動を拡大し、2012年度以降は、連携活動がより円滑化した。

(2) 拠点校との連携活動

連携拠点学校園とは研究員を通して、あるいは学校の具体的な教育活動への参加を通して、連携を深めてきた。さらに、拠点校を含む複数の園や学校で、観察実習や教育実習を実施してきた。

III 活動の具体的内容

月1回、16:30～18:00までの1時間30分実施してきた。令和4年度の取組の概要は次のとおりである。

1 主な研究内容

- (1) 学部と連携拠点学校園との連携の内容、在り方
- (2) 本学部学生の研究発表等への指導
- (3) 本学学生への指導的立場からの活動
- (4) 本学部学生の小学校教育実習及び幼稚園

教育実習の模擬授業の指導

- (5) 学校現場の課題について、大学側教員・研究員の研究協議

活動の柱の一つは、本学のカリキュラムに応じた連携である。

教員採用試験前、教育実習前後、卒業研究発表等について共有したり指導・助言を仰いだりすることとおして、多面的に学び合うことをねらいとしている。

もう一つは、研究員と学生との対談である。教育現場の今日的課題の解決を目指した学生の学修や地域活動について懇談的に指導を受けたり、教育現場の研究員から学ぶ姿勢を学生に身に付させたりすることをねらいとしている。

2 令和4年度の取組

月日	主な研究活動内容
7月5日(火)	委嘱状交付 年間計画立案
7月26日(火)	(小学校) 教員採用試験の模擬授業の指導・連携研究
10月4日(火)	3年生とのグループ別対談
11月22日(火)	2年生とのグループ別対談
12月6日(火)	(小学校) 4年生「小学校における学級経営について」 (幼稚園) 幼稚園教育実習報告会
1月10日(火)	1年生とのグループ別対談
2月14日(火)	4年生の研究発表への指導

IV 活動の実際

研究会の内容と学生の取組に対する成果と課題を見るために、連携拠点学校園の研究員による評価を実施した。

(1) 結果

「学びに向かう力・人間性等」「思考力・判断力・表現力」「知識・技能」の3つの観点のそれぞれについて4件法で評価を求めた。各回における評価は次のとおりである。

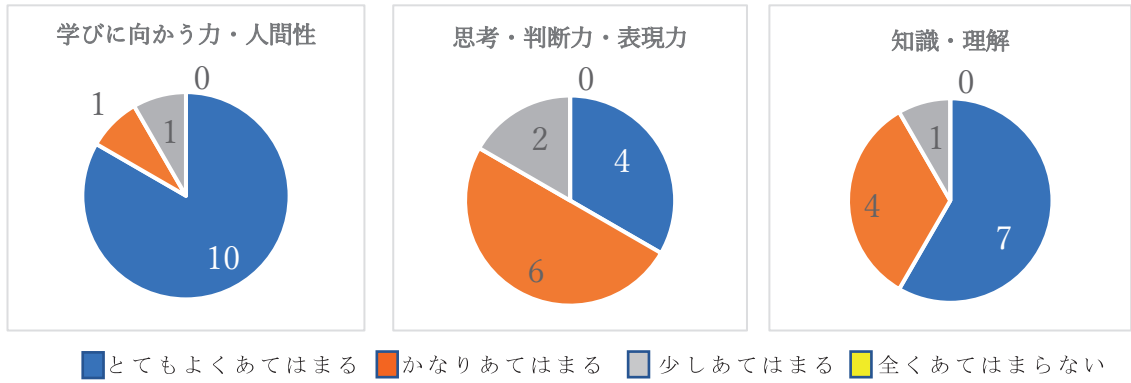


図1 第3回 3年生とのグループ対談

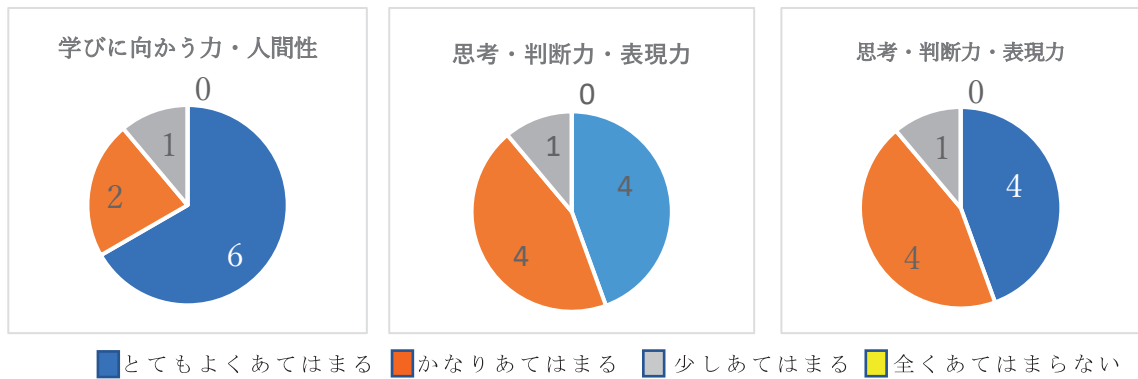


図2 第4回 2年生とのグループ対談

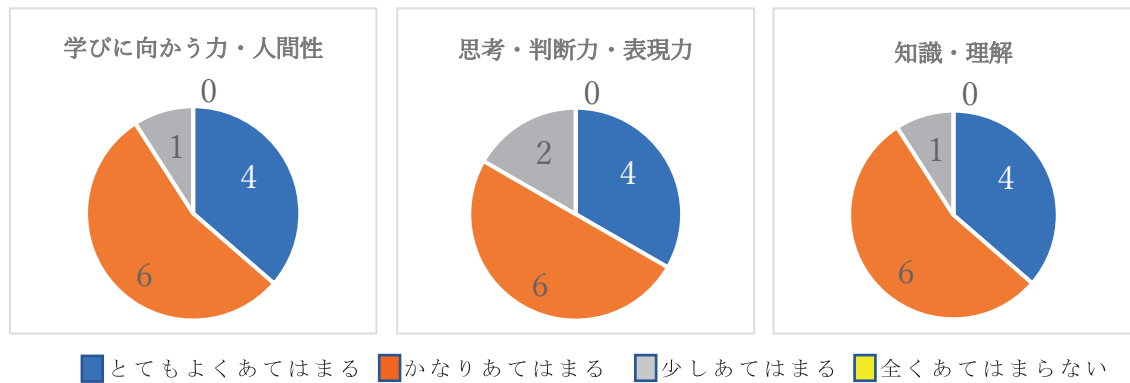


図3 第5回 小学校「小学校における学級経営について」
幼稚園「実習報告会」

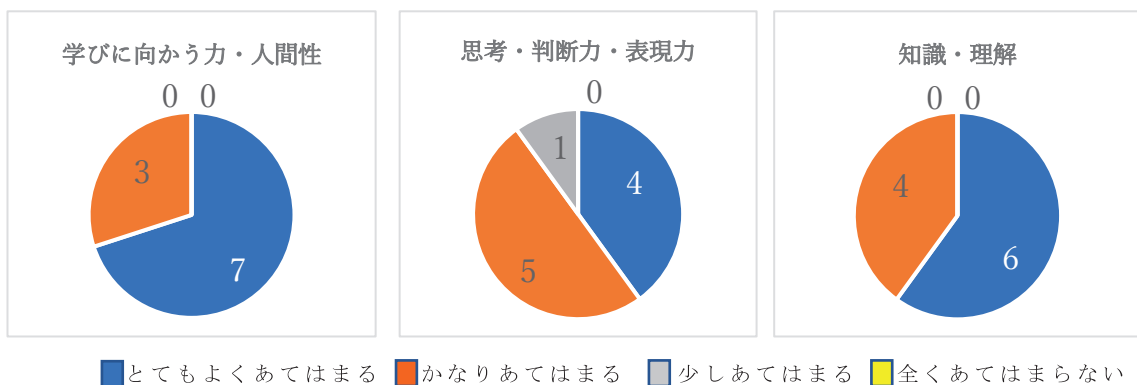


図4 第6回 1年生とのグループ対談

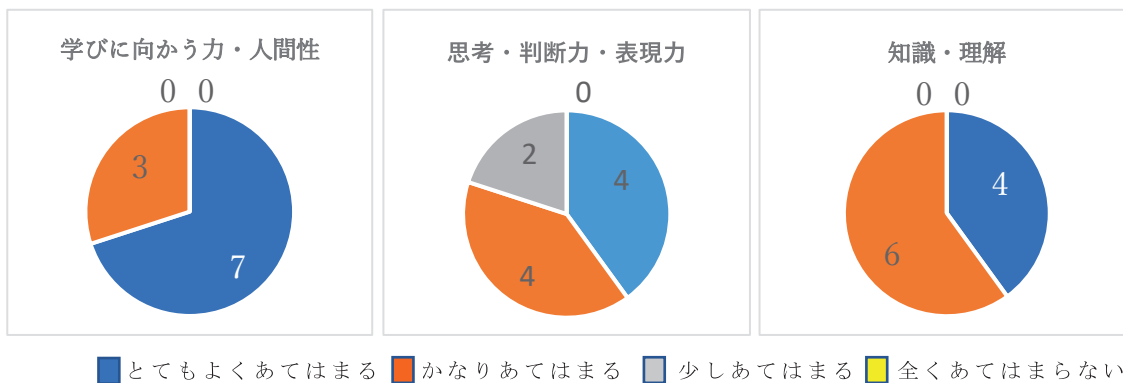


図5 第7回 4年生「卒業研究発表」

(2) 考察

○ 年間をとおして連携拠点学校園の研究員から学生の発言や姿勢に対して高い評価を得ることができた。

3つの観点の中では、ほとんどの回において「学びに向かう力・人間性」が高い傾向にあり、本学部学生の姿勢が肯定的にとらえられていると言える。

総合的に高い評価の中では、「思考力・判断力・表現力」は他の観点に比べやや劣る結果となった。発表・対談などそれぞれの内容において、「考えたことをまとめる」「分かりやすく伝える」「発言を共有したり練り上げたりする」ことによって学びを高め合う力を伸ばすことが今後の課題と言える。

○ 学生の振り返りによると、連携拠点学校園の研究員による指導・助言が意欲の向上や不安等の解消につながったという感想が多かった。

1年生～3年生におけるグループ対談では、学生の質問に対して、懇談的に回答をしていた。一人一人に寄り添い対話を進めていただいたことは、学生にとって安心感をもたらした。次への展望をもたらすことにつながったようである。連携事業の大きな成果と言える。

学校園の研究員との対談をとおして解決の見通しをもつことができたり、発表に対する指導・助言を仰いだりすることは学生たちの実践的な学修を進める上で大きな成果があった。研究員とともに本学部教員も多面的に学び合うことができた。

その中で、本年度の研究所の取組から即実践化へとつながった事例があった。グループ対談において、連携拠点園の研究員が学生からの相談に対して、「来園して、実際に園児たちの様子を観察したら」と回答した。それを受けて2名の学生は、毎週園に通い、ボランティア活動に取り組んだ。2名ともそれぞれ違った目標をもち、活動をとおして課題を解決しながら、様々なことを学んでいるところである。地域連携事業ならではの成果であると言える。

今後は、これまでの連携協力体制を土台にしながらか協議・研究する場を設け、更なる実践研究を積み重ねることが求められる。

V 今後の展望及び課題

本学部と連携拠点学校園と「相互の資質向上のための連携の在り方に関する研究」や「人間の発達や育ちに関する研究」を進めることをねらいとして、本年度は計画通りの活動を実施することができた。連携拠点学校園の研究員・本学部学生・本学部教員がそれぞれの立場や視点から共々にブラッシュアップを重ねてきた。

本学部学生が実践上の課題について、連携拠点

VI 研究員名簿及び大学側関係教員名簿

	連携学校園名	職名	氏名
1	学校法人天竜学園天竜祝吉幼稚園	園長	佐々木 慈 舟
2	学校法人天竜学園天竜幼稚園	主幹教諭	田 實 美 幸
3	学校法人天竜学園天竜第二幼稚園	主幹教諭	北 園 由美子
4	学校法人天竜学園天竜第三幼稚園	主幹教諭	山 城 隆 子
5	学校法人天竜学園天竜祝吉幼稚園	主幹教諭	河 野 祐 子
6	学校法人相愛学園第一幼稚園	主幹教諭	中 尾 恵美子
7	都城市立南小学校	主幹教諭	吉 永 尊 昭
8	都城市立東小学校	主幹教諭	嶽 野 直 樹
9	都城市立上長飯小学校	主幹教諭	江内谷 義 郎
10	都城市立祝吉小学校	主幹教諭	森 和 裕
11	三股町立三股小学校	主幹教諭	外 山 繁
12	三股町立三股西小学校	主幹教諭	西 園 修 二

	大学学部名	職名	氏名
1	南九州大学人間発達学部	教授	宮 内 孝
2	南九州大学人間発達学部	准教授	後 藤 吉 道
3	南九州大学人間発達学部	准教授	河 野 康 男
4	南九州大学人間発達学部	准教授	藤 本 朋 美
5	南九州大学人間発達学部	助教	福 富 隆 志